

河竹繁俊著『日本演劇全史』

国 分 保

ここに二、三年の間に演劇図書が目立つて多く出版されている。演劇芸能に関する一般の認識が高まったせいか、あるいはいよいよゆる岩戸景気の影響の然らしむる結果かどうかは知らないが、ともあれうれい傾向だと思つている。中でも私にもっとも喜ばしいのは恩師河竹繁俊博士の「日本演劇全史」の公刊である。

日本演劇史の著書は、今までに幾種類か出されている。即座に頭に浮ぶものだけをあげても、灰野庄平の「大日本演劇史」、飯塚友一郎の「日本演劇史」、高野辰之の「日本演劇史」、伊原敏郎の「日本演劇史」三部作浜村米蔵の「日本演劇史」（現代演劇論大系内）などのほか、明治演劇だけに関するものでは秋庭太郎の「東都明治演劇史」、関根黙庵の「明治劇壇五十年史」等があげられる。しかし残念なことに、これらはみな古典演劇の歴史か、明治、大正期

だけの演劇史であつて、上世から近世までの一貫したものは一つも見当らない。だからといつて価値の有無を評価しようというのではないが、終始一貫した演劇史の出現を渴望してやまなかつた。このときに河竹先生の「日本演劇全史」が出版されたことは、干天の慈雨のようなよろこびを感じさせられた。

待望久しかった本書が出版されると、新聞、雑誌などでいろいろな方面の人から、それぞれ異つた角度からの書評がなされたことは当然といわなければならぬ。これは一々紹介することは許されないが、総括して書評の責を果さしてもらふことにする。つまり、次の三つに要約されると思う。第一には日本演劇史を一貫した一つの流れとして、展開推移のあとを明確に体系づけたことである。時代を代表する演劇の形態からだけ見ると、上世の舞楽、中世の能

楽、近世の人形洋踊時と歌舞伎、近代の諸演劇は、いずれもそれ自体独自の異つた系統の歴史をもつているが、その根底は一つで、いつも国民的、民衆的芸能がこれら各種の演劇形態の基盤になつてゐることを、立派に体系づけ論証している点が本書の特長として誰もが賞讃している。該博な学識による先生の遠見である点、まさに歴史的偉業と称してよいと思う。

第二には、前にもちよつと触れたが、明治維新以後の演劇諸相を日本演劇史の流れの上から解明し、相互連関を持たせ、大戦後の現代までを事細かに解明していることである。明治以後の演劇は西洋演劇の輸入もあつて、文字通り混沌たるものであつたとともに、自ら自身がおのおのその渦中にあるがために、資料は豊富な一面却つて客観的立場から静観し整理することがむづかしい。しかも先生は江戸歌舞伎作者の大御所河竹黙阿弥の家をつがれたと同時に、坪内逍遙博士の文芸協会に属し指導をうけられた、いわば新旧演劇の両方に關係を持っていたことになる。このように複雑な立場におかれると、事情には精通していても一

歩退いて第三者になり切ることは一層困難

になることはいうまでもない。こうした困難を克服して、見事に完成したことは確かに敬服しないではいられない。昭和三年の演劇博物館の設立に尽力され、引続いて大学の教壇に立たれたことが、むしろ立場をかえる機会となって本書を書く上に都合がよかったとも推察出来る。ことに戦後のアメリカ占領治下の演劇政策の内情の記事は先生だけの知っている貴重な歴史的資料といえる。また伝統演劇と関連を持たないのは新劇だけが、明治の帰化人新劇も今後民俗的芸能から栄養を摂らない限り新時代を代表者にはなれないと予言している点、まことに傾聴に価する。

以上の三つは本書の長所として、書評であげられたおもなるものだが、第三には批判というよりも要望の数々である。演劇学者の先生の著書であればこそ、後学者はこれを機に教示してほしかった問題点があるわけだ。しかし千三百有余年にわたる演劇史を完成するだけでも容易な業ではない。

これらの要望は今後の機会に満たして戴けばよいと思う。決して本書の短所とはなら

ない。

本書は本文一五四頁の大冊で、内容の分類は序説七頁、第一篇の上世が八五頁、第二篇の中世が一二八頁、第三篇から第七篇までの近世が五二二頁、第八篇から第一篇までの近代が四〇三頁、第一二篇の結語が一六頁から成っている。そのほか日本演劇、芸能年表の一七七頁と索引の九五頁が附録として加えられている。

先生は書き上げるまで十年かかったと話されているように、並大抵の努力ではなかった。原稿の完成した一昨年は長い間の疲労とほっとした安心からか、珍らしく半年ほど大病を患って床につかれたことを思い合せると、いかに心血を注がれた大著であったか知ることが出来る。一九五七年度の毎日新聞社学術研究奨励金が本書に授与され、病いの枕頭に飾られたのをたまたまお伺いして拝見したときは、私も無量の感に打たれたことを思い出す。

(岩波書店刊・A5判定価二五〇〇円)

☆

☆

「国文学研究」投稿規定

一、会費年額四百円を納入する者は、誰でも本誌に投稿することができる。

一、投稿論文の採否は当編集委員会に一任されたい。

一、投稿論文は原則として、四百字詰原稿用紙三十枚前後とし、原稿用紙二枚程度の要旨を添えること。

一、投稿論文には住所、卒業年度、職業を銘記すること。

※ 誌代(毎号平均百七十円)を納入する者は誌友として「国文学研究」を送付する。